

金融ビジネスにおけるオルタナティブデータ活用

副島 豊

目 次

1. なぜオルタナティブデータか
2. オルタナティブデータの特徴と分析手法
3. 日本銀行での活用事例
4. 生成AI技術との新結合
5. 人と組織の課題

本稿ではオルタナティブデータの四つの特徴を概説し、日本銀行での活用事例を具体的に解説する。実体経済と金融市場のモニタリングが主たる用途となっており、様々なデータと分析技法の組み合わせで多様な活用がなされている。後半では、生成AI技術とオルタナティブデータの結合により新たな金融サービスの創造が始まっていることを紹介し、データ活用に向けた人材育成や組織体制面での課題を述べる。

1. なぜオルタナティブデータか

デジタル化社会の深化がデータエコノミーを加速させている。多様な経済活動のみならず社会・自然現象がデジタル媒体に記録され、利用可能なかたちでストレージされ、ビジネスや公共サービス、個人の生活に活用される。そうした事例をあらゆるシーンで目にする機会が増えている。

それらは数字だけではなく、文字、画像、音声など、世界のありようを映し出す多様な媒体で記録され、保存されている。ドライブレコーダー、スマートフォンのGPS、SNSへの書き込みや写真

の投稿、サーチエンジンやECでの検索、衛星画像、通話やビデオ会議の記録、POS、流通在庫管理システム、経理や労務人事、あらゆるITシステムへのアクセスログ。われわれはネットや情報システムを流れる膨大なデータの大河の中で生きており、そこで情報を入手し（提供し）、情報を処理し、意思決定を行ってビジネスを進め、日常生活を送っている。

数量や価格を中心とした伝統的なデータや、統計として活用されることを意図して作成された伝統的なデータに対し、これらはオルタナティブデータと呼ばれる。もともとは収集意図がなく、何



副島 豊 (そえじま ゆたか)

SBI金融経済研究所、SBIホールディングス・SBI生成AI室。1990年日本銀行に入行。金融研究所や決済機構局、金融市場局、金融機構局などで、リスク計量、市場分析、マクロブルーデンス、決済システム分析や規制・制度設計に従事。1990年代よりAI、ビッグデータ解析、ネットワーク分析など最新の分析手法を導入。金融システムレポートなどを創刊したほか、決済システムの国際基準策定やCBDC（中央銀行デジタル通貨）などの国際フォーラムに参加。中央銀行DXの推進役も担う。